

---

# シリーズズテレビ局【ギャグな番組へ】

度辺 彩番

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シリーズテレビ局【ギャグな番組へ】

### 【Zコード】

Z2933Z

### 【作者名】

度辺 彩番

### 【あらすじ】

シリーズテレビ局で働く10歳天才子役『横富なうる』。ある日先輩の『星神ルルア』に呼ばれて『ギャグなシリーズ』こと『ギャグシリ』に出演することになっちゃった！

有名司会者『星神ルルア』、イケメンなオカマ『萌川ノエリ』、顔はそつくりなのに性格は180。逆の双子『ラウミ』『カウミ』、まったく笑えない芸人『山海安士』、とっても突っ込みの激しい『金南ナセル』

そして、ギャグシリの新入り『横富なうる』。

なうると愉快な6人のバカ騒ぎをじご覧ください！！

# 1・お呼び出し。てか、なんで？

「」はシリーズ・テレビ局。

沢山の人が今日もここで働いている。

その沢山の中には私『横富なうる』も入る。

そして今、私はこのテレビ局の有名司会者『星神ルルア』待ち合わせをしている。

「キミがなうるちゃんなんだね？」

よくテレビで見るよ。天才子役はすごいね。」

そう私はこのシリーズ・テレビ局の天才子役。わずか5才から『デビュー』し、今の10歳までずっとこの仕事をやっている。

そして彼女は『星神ルルア』。現在十五歳。このテレビ局の有名司会者だが、自分からも他の人と一緒にゲームに挑んでいくことでも有名。

「はい。私もよく見ています。」

素早く手を出し握手。

「いきなり呼びだして御免ね。」

私は昨日、彼女に手紙で呼ばれたのだ。けれど、手紙にはなぜ呼んだのか分かる理由が書かれていなかった。だから私は何で呼ばれたのか知らない。

「じゃあついてきて。」

彼女についていく。

「で、なつむちゅん。」

「なつむでいいです。」

相手は年上。しかも先輩だ。  
呼び捨てがいいだろう。

「そうか。じゃあ僕のことはルルアでよろしく。」

「…。わかりました。」

『ルルアでいい。』と言ったのには少し驚いた。

「ああ、着いたよ。」

着いたところはスタジオ?。  
何でこんなところ?…。

「入つて。」

入つてみるとそこは暗い中に『ギャグなシリーズ』という番組のセ  
ットがあった。

2 ドラ キリなんて反則じゃああい！

『ギャグなシリーズ』こと『ギャグシリ』。  
この番組にはもちろんルルアも同会員としていた。 そういえば、今考えるとおかしい。

『ギャグシリ』は6時30分に7時20分で土曜日

金曜、土曜、日曜日が放送日。

結論として今世『ギャグシツ』の放送母といふことになる。

「ねえ。ルルアビうこーひーと?」

「！？」

掛け声がしたかと思えばパツと電気がついた。  
そしてパアアアアンというクラッカーのいい音がなる。  
そこにいたのは…

「あの……これは……」

「シッキリだよー。ああ、わかれよー。」

今、激しい突っ込みをしたのは突っ込みが激しいということでも有名

な、

『金南ナセル』。

「ねえねえ。怒つてこらないうちのうじとがつぱたいてえー？」

「俺様がはたいてやるしこー」

パチンコというい音が響く。痛そうだ。  
ちなみに彼らは双子でドモのまつが姉の『ラウミ』。  
ドモのまつが弟の『カウミ』。

「くつくつ。俺のネタくらいかわいい子だぜ。」

彼はまったく面白くないことで逆に売れてしまつた芸人の『山海安士』。

「けなします?」

「なんでそつなるの?ー!」

「あラ。ホントかわいこ子?お嬢さんにしてみたいくらー

いや、嫁の間違いだろ?う。

ちなみにこの人はイケメンなオカマの『萌川ノエリ』。

「まひなうむ自己紹介。」

「あーーはい。横面なうつるです。  
宜しくお願ひします。」

周りから盛大な拍手がおこる。

「みんなー!これからはこの横富なつるが番組レギュラーだよ!  
じゃあ、明日もお楽しみに!」

スタッフのほうから「おーー」と声があがった。

### 3・迷子の迷子の恋恋やん

よかつた。放送が終わつたよ。…つて…

「明日…?」

「やつだよ」

学校の」ともあるし、家の人も知らないのは…

「ちなみに一日前になつるの両親に許可を取つたから安心して。」

知らなくなつた。

こんど親について家族会議を…  
いや、もつ今日しようつか。

「なつるちゃん――――帰りますよ――」

今、私を呼んだのはマネージャーの『西島古葉』さん。

美人でいい人なのだが、マイペースすぎてもくづくブルをおこす。

「は――い。」

そつと西島さんの車に乗り込む。  
エンジンがかかり車が動き出す。

「やつやつ。『ギャグシリ』の制服は、家に送つておいたから。  
確認してね。」

「はい。わかりました。」

「あの制服だけど、萌川さんが「ザイン」したみたい。明日会つたらお礼をお言つておいてね。」

萌川さんは意外に「ザイナー」としても名をはせていろらしく。

「あら、この道路混んでいるわね。」

「ああ、西島さんのデジが。

「あの//スはよくあるので慣れた。

「うう//スはよくあるので慣れた。  
カーナビを見て答えただけだけだけね……。  
曲がって、またすぐにまた左に曲がる。また//スだつ……

「どうしましょ。」

「クリクションの風になつちやつたわ……」

どうやら一方通行を逆に入つて行つたらしく。  
焦つて車を出す。

「あれえ～?...」

次には迷子だ。

「カーナビを見てください。」

「ああ。ここね。よーーしいくわよーー！」

本当にこの人は大人なのだろうか…。  
そして走ること十分。

「ほら、ついたわ。じゃ あなたちやんまた明日」

「はい。じゃあ」

#### 4・ドアは開けられぬまま蹴り、閉めぬまま鍵を敲き立てる

車から降りて家の中に入る。

「ただいまーー。」

誰もいない。

あつでも親はいるか。

つて親と言えば…。

ベッドルームに向かってダッシュ。バンツと頭を立ててドアを蹴り開ける。

「あー。なつるお帰りなさい。」

蹴つてドアを開けるのはよくないわよ。」

「ママの髪の毛がついたんだが、早く謝りなさい。」

あんたら言われる筋合こないし。

だかど今はやんなこと蹴つてこぬ場合だつやなに。

「ねえー。ギャグシコ！」出演つてじゅうじゅー。」

「あーー。私たち許可したかどー。」

「何やつてんのーー。」

「服はなつむの部屋だぞ。れむ。」

訳の分からぬまま追い出された。

まあ、部屋行くか。

ドアを開け中に入り鍵を厳重にかけてベッドにダイブ。

「はあ――――――。」

起き上つて机の上の制服を取る。

入っていたのは『黒のシャツ』、『紫のサロベツト風（？）のスカート』、『黒のフリルの付いた靴下』、『青いじくろの付いたリボンの髪飾り』。

と…男の子用の制服？

「なんで…。」

落ち着けなうる。これは多分私のじゃない。  
少しサイズが大きいし。

そうか。これを贈つたのは他でもない西島さんだ。  
またドジッたのだろう。  
よし、メールだ。

「えつと…」

『こんばんわ。夜遅くにすみません。

届いた制服ですが男の子用の制服も入つていきました。  
明日、持つていきます。』

「送信と…」

送信完了だ。

これでOKのはずだ。

みじ、ご飯を食べ、お風呂に入り寝ようか。

4・ピアは闇にひれは隠つて、闇ぬひれは鍵で厳重に…（後編）

これからも彩番頑張るから  
宜しけ

やないわ

## 5・ライスではなく麺でしょ？オムライスには。

机の上にママが作ったと思われる夕飯があった。

「いただきまーーーっすー！」

夕飯の近くに今田のメニューが書かれたメモがあった。  
そのメモにはこう書いてある。

『今日のメニュー  
・オムライス  
・サラダ  
・トマトスープ』

らしいのだが…

私には間違つてこると思つ。

簡単に言つと

- ・オムライス　＝ライスではなく麺。ケチャップではなくマヨネーズ。＝オムライスではない。
- ・サラダ　　＝材料と思われるものは茄子、苺、チヨコレート。ドレッシングにホイップクリーム＝この組み合せはしてはいけないもの。
- ・トマトスープ＝トマトの缶を開けただけ＝冷凍物のほうがいい。

ママのところへ夕食を持ってダッシュ。  
ドア蹴り開け中に入る。

「あら？美味しい夕食持つてどうしたの？」

「これのビニが美味しいってこのへー。」

「うーーん？ すべてかな。」

「ママの舌は完璧狂っているだろ？。」

「どれもメニュー通りにならなくてなーよー。」

「あーー。オムライス御免ね。」  
「飯炊き忘れちゃった。」

「ライスじゃないよ！ オムライスだけじゃないしーー。」

「サラダヒトマトスープも色々とだめだと毎日。」

「もつーーだつたらママの夕飯のコンビニのパスタ食べなさい。  
これまたママ食べるかひ。」

「言わねなくてもそうするよーー。」

部屋を出て蹴つて閉める。  
たしかパスタは冷蔵庫にあつたはずだ。  
じゃあ向かうはキッチンだ。  
キッチンへダッシュ。

「…………。」

そりゃあの料理（？）を作つていれば、さくらうて泣くくなるだろ？  
……。  
フライパンは何かこべり付いてるし、道具は散乱してるし、すべて

そのままだ。

今日はだけでは整理するのは大変だから明日にしよつ。  
どうせ今日は誰もやらないし。

パスタを持って部屋に行く。

中に入り鍵を厳重にかける。パスタを食べるつん、普通に美味しい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2933z/>

---

シリーズテレビ局【ギャグな番組へ】

2011年12月18日11時47分発行